関西国際大学研究紀要　第 24 号，2023 年，273－282

小児看護学実習における
保育所での健康教育を通した学生の学び

Student learning in pediatric nursing practice from health education at a nursery school

横山利枝*　西村美登里*　本田真也*　中島登美子*
Toshie YOKOYAMA　Midori NISHIMURA　Shinya HONDA　Tomiko NAKAJIMA

Abstract

This study aimed to clarify the learning obtained by nursing students in pediatric nursing practice through health education at a nursery school. The subjects were 38 third-year nursing students. Analysis of the free descriptions of health education before and after nursery school practice resulted in the extraction of three aspects that students wanted to learn prior to the practice: clues on how to relate to children, ways to relate to children, and nursing according to the growth and development of children. Six aspects were extracted from students' learning after the practice: innovative drawing to attract children's interest, innovative methods to help children concentrate, innovative methods to encourage children's comprehension, understanding children's unimaginable abilities, important aspects when interacting with children, and the experience of being shaken by children's reactions.

Students in pediatric nursing practice require support that (a) motivates them to learn, (b) helps them apply their learning from nursery school practice to hospital practice, and (c) promotes health education at the preparatory stage so that they can accept and positively interpret children's reactions and face children with a sense of peace and calmness. Furthermore, health education in nursery school practice deepens students' understanding of children and encourages them to grow as caregivers.

キーワード：小児看護学実習，保育所実習，健康教育，保育所，学生の学び

Ⅰ　はじめに

近年の少子化社会において，看護学生（以下学生）は身近に子どもと接する機会が少なく，小児看護学実習で子どもにどう関わればよいのか戸惑う学生が多い。そのため病院実習前に行われる保育所実習は，学生が子どもと直接関わることができる重要な機会といえる。

保育所実習は，学生が健康な子どもの実情を理解し，健康な子どもを肯定的に捉えることができる機会となっている[1)]。さらに，健康な子どもの理解だけでなく，健康問題を持つ子どもが退院後保育所でどのような生活をするのかを理解する貴重な機会にもなりうる[2)]。学生は，子どものコミュニケーション力に助けられ，遊びや日常生活の援助に関わることを通して子どもの個別性や成長発達の違いに気づく機会となっている。そして，保育士の子どもへの関わりから，子どもの持つ力を引き出し，

*関西国際大学保健医療学部

成長発達を促す援助を学んでおり，病院実習に活かしたいという学習意欲につながっている[3)]。このように保育所実習で健康な子どもと関わることにより，子どもの反応を観察することができるようになり，健康障害を持つ子どもの援助を行う視点を育てることや，子どもを理解することに繋がると考える[4)]。

さらに保育所実習で健康教育を実施することは，健康な子どもの成長発達の理解を深める，看護専門職としての意識を高める，効果的な子どもとの関わり方を学ぶことにつながっている[5) 6) 7)]。このように保育所実習での健康教育の実施は，学生にとって子どもの成長発達の特徴を理解し，子どもとの関わり方を経験を通して学ぶ機会となり，保育所での経験を活かした病院実習での子どもとの関わりにつながる重要な学習の機会であると考える。

本学においても，学生が子どもの成長発達の理解を深め，健康増進に向けての支援への意識を高め，主体的に実習に取り組めるよう小児看護学実習の保育所実習に健康教育を取り入れている。そこで，小児看護学実習における健康教育の方法や内容，効果的な教育支援について検討するため，保育所実習で健康教育を実施することによる学生の学びを明らかにしたいと考えた。

Ⅱ　研究目的

保育所実習で健康教育を実施することによる学生の学びを明らかにする。

Ⅲ　用語の定義

保育所：児童福祉法に基づく施設認可を受けている保育施設とし，保育園，認定こども園を含む。

健康教育：4〜5 歳以上の園児が身体のしくみを理解し，その内容に関連して健康に過ごすための行動がとれることを目標とした教育。

Ⅳ　研究方法

1．対象

看護系大学に在籍し小児看護学実習（以下，実習）を履修する学生のうち，臨地での実習が行え，研究同意を得た 3 年次学生 38 名。

2．実習の概要

2．1．小児看護学実習の概要

(1) 実習目的

発達過程にある子どもと家族の健康生活を踏まえ，病気や障害が子どもと家族に及ぼす影響を理解し，必要な看護を実践できる基礎的能力を修得する。

(2) 実習方法

保育所３日間，病院４日間と学内実習を含んだ 10 日間で原則，保育所実習の後病院実習を行った。

2．2．保育所実習の概要

(1) 実習目標

子どもの成長発達の特徴を理解し，関わることができる。

(2) 実習内容

子どもの成長発達を促す遊びや日常生活に関する援助，および健康教育を実施する。

(3) 健康教育

健康教育は「子ども達の健やかさを育む」ことを目的に，4〜5 歳以上の園児に 20 分程度の内容として企画した。テーマは全グループ共通で，「たべもののとおりみちー消化器系ー」とした。子ども達が「身体のしくみ」を理解し，その内容に関連して健康に過ごすための行動をとれるようになることを目標とする教育内容を学生が考え，子どもの好きなキャラクターを取り入れ教材を作成し実施した。

3．調査期間

2021 年 7 月〜2021 年 12 月

4．データ収集方法

調査は，質問紙法を用いて行った。健康教育について，保育所実習前は「小児看護学実習での健康教育を通してどのようなことを学びたいと思うか」，実習終了後は「小児看護学実習での健康教育を通してどのようなことが学べたか」についての自由記述とした。

質問紙によるデータ収集は，1 回目は実習開始前のオリエンテーション後に説明と依頼を行い，同意が得られれば質問紙に回答してもらい，2 回目は保育所実習終了後に実施した。

5．分析方法

本研究は，実施した質問紙調査における「健康教育についての学び」への自由記述内容を分析対象とした。

自由記述内容を精読し，実習での健康教育を通して学びたいこと，学べたことについて表している部分を文脈の意味を損なわないように抽出し分析を行った。その内容を研究者間で検討し，内容の類似するものを意味付けしてサブカテゴリーとし，さらにカテゴリーへと抽象化した。

6．倫理的配慮

学生に対して小児看護学実習の開始前に，書面を用い口頭で研究目的や方法の概要，同意は任意であり同意しなくても不利益を被らないこと，同意撤回の任意性および撤回による不利益を被らないこと，個人情報の保護等について説明を行った。

研究依頼の説明は，対象者全員に行い，質問紙の回答をもって同意を得たものとした。ただし，研究者が協力者と非協力者が識別できないよう質問紙の配布と回収は全員に対して行った。質問紙の分析は，成績判定に影響しないよう実習成績調整後に行った。

なお，本研究は関西国際大学研究倫理委員会の承認を得て行った。

Ⅴ　結果

保育所実習での健康教育を通しての学びについて自由記載の内容を分析した結果，実習前の学びたいことは 3 つのカテゴリー，実習後の学べたことについては 6 つのカテゴリーが抽出された。以下，【　】はカテゴリー，＜＞はサブカテゴリー，「　」はデータを示す。

1．健康教育を通しての学び

1．1．保育所実習で学びたいこと

(1)【子どもとの関わりの手がかり】

学生は実際に子どもと関わった経験が乏しいため，「子どもが興味を持つもの」は何か，「どのように進めると興味をもって聞いてくれるのか」，「関心を持ってもらうための工夫」や「どのようなことに興味があるのか」など＜子どもの興味を引く方法＞や＜子どもの興味の対象＞について学びたいとしていた。また，「実際に 4・5 歳児はどこまで理解することができるのか」や「子ども達の反応を知りたい」といった＜子どもの理解度や反応＞についても学びたいとし，どのようにすれば子ども達と上手くかかわれるか【子どもとの関わりの手がかり】を探っていた。

(2)【子どもとの関わり方】

学生は，「成人に対してのコミュニケーションのとり方との違い」や「子どもわかりやすいように伝えるにはどうしたらよいのか」，＜子どもとのコミュニケーション＞について学びたいとしていた。また，「子どもにどのようにして関わることで心を開いてもらったり，信頼関係を構築したりできるのか」，「子どもとの接し方」や「子ども達への振舞い方」など＜子どもへの接近法＞について学びたいとしていた。

表１　保育所実習で学びたいこと

カテゴリー	サブカテゴリー	データ
子どもとの関わりの手がかり	子どもの興味を引く方法	幼児に対する興味のひき方 どのように進めると興味をもって聞いてくれるのかについて 関心を持ってもらうための工夫 どのような接し方をすれば、子どもの興味を引き出すことができるのか 子どもと関わるときにどのような工夫が必要であるか 子どもが興味を持つもの 子どもにどのように伝えたら関心を持ってもらえるか
	子どもの興味の対象	どのように興味を示すのか学びたいと考える 子どもの興味はどういうものにわくのか どのようなことに興味があるか
	子どもの理解度や反応	子どもがどこまで理解できるのかを知りたい 実際に、4・5 歳児はどこまでのことを理解することができるのか 幼児がどれだけ理解できるのか。 子どもがどのくらい健康教育に興味を持ってくれるのか。どのくらい理解してくれるのかを学びたい プレパレーションの反応 子ども達の反応を知りたい
子どもとの関わり方	子どもとのコミュニケーション	子どもに対してのコミュニケーションと成人に対してのコミュニケーションのとり方の違い コミュニケーション コミュニケーション方法を学びたい 子どもにも分かりやすいように伝えるにはどうしたらよいか学びたい
	子どもへの接近法	子どもとの関わり方 子どもにどのようにして関わることで心を開いてもらったり、信頼関係を構築したりできるのか 子どもとの接し方等 子ども達への振舞い方
子どもの成長発達に応じた看護	子どもの成長発達や疾患の理解	小児の身体・精神・社会的な発達過程を学ぶ 小児特有の発達段階 病を持つお子さんと関わる中で、子どもながらに何を抱いているのか知りたい 年齢別の子どもの特徴について学びたい 子どもの身体発達や子どもによく見られる疾患や症状を学びたい 年齢による違いや成長の過程を学びたい 発達段階を理解し、子どもの受入れ方がどのように行われるかを学びたい
	子どもの成長発達を踏まえた関わり	子どもの年齢や性別等個人に合わせた対応の仕方 小児の身体・精神・社会的な発達過程を学び、幅広い年齢層の個別性のある看護について理解する ケアしていく中での成人と小児の違い 小児特有の成長発達段階ごとの看護について 小児特有のケア方法 成人期との病態の変化、バイタルサインなど観察するところ 小児に対する看護

(3)【子どもの成長発達に応じた看護】

学生は，「年齢による違いや成長の過程」や「小児特有の発達段階」，「年齢別の子どもの特徴」を学ぶとともに，「子どもによく見られる疾患や症状」，「病を持つ子どもと関わる中で子どもながらに何を抱いているのか」など，健康な子どもだけでなく健康問題を持つ子どもへも目を向け＜子どもの成長発達や疾患の理解＞をしたいとしていた。

また，「子どもの年齢や性別等個人に合わせた対応の仕方」や「小児特有の成長発達段階ごとの看護について」学び，「幅広い年齢層の個別性のある看護について理解する」というように＜子どもの成長発達を踏まえた関わり＞を学びたいとしていた。

2. 2. 保育所実習で学べたこと

(1)【子どもの興味を引く方法】

健康教育を通して，「子どもは体を動かしたり，視覚的な部分からのほうが興味をひきやすく，集中して聞いてくれることがわかった」，「5・6歳児の興味のひき方，話し方や身振り」など＜話し方や伝え方の工夫＞について学んだとしていた。また，「子どもはキャラクターなどに興味を示す」ことがわかり，「キャラクターを親しみやすいものにすることで，話にとてもすんなり入ってきてくれた」など＜子どもの好きなキャラクターを使う＞工夫が効果的であるとしていた。

(2)【子どもを集中させる工夫】

学生は，子どもたちが「積極性が強く，参加型のものには参加意思が強い」と感じていた。「質問を投げかけたり，クイズをする」ことで「全員が手を挙げて参加できるように促すことは工夫の一つであると学んだ」とし，「クイズに対しては，喜んで反応」してくれ，「子どもに問いかけながら進めると，子どもものってくれ楽しんでできた」としていた。また，「手遊びを最初に入れたことで，お話を聞く体制になった」とし，「何をするにしても遊びの要素は必要」だと感じていた。子どもを集中させるためには，＜子どもの参加を促す方法＞を工夫し，＜遊びの要素を取り入れる＞ことが必要だとしていた。

(3)【子どもの理解を促す工夫】

子どもに「話を理解してもらうためには，なじみのある語句を使って簡潔に伝えることが大事」であり，「子どもがわかりやすい言葉で伝えることの必要性」や「声のトーンを高くすること，言い回しをわかりやすい言葉に換える工夫が特に大切」であり，＜子どもにわかりやすい話し方＞の重要性を感じていた。

また，「目に見えない自分の体のことをフェルトで作ることで理解してもらいやすかった」ため「教育の時は目で見てわかりやすい工夫」をし，「身近なものに例える」ことや「子ども達の生活と結びつける」など＜目に見えるようにする＞工夫が効果的であるとしていた。さらに，「自分で触ったり，発見したりすることで興味を持ち，印象に残る」ことがわかり，「自分の体と関連づける」ことや「子ども達の生活と結びつける」など＜実際に体感する＞ことが子どもの理解を促すとしていた。

(4)【想像を超える子どもの能力】

「子どもはいろいろなものに興味を示し，好奇心旺盛に取り組むことが多い」と感じ，「話す内容に興味を持ってくれて，積極的な児が多かった」と感じていた。「子ども達は，自分の持っている知識を伝えようとしてくれた」，「聞いたことを人に伝えて覚えようとしたり，興味があることは積極的にしようとする」など＜子どもの興味・好奇心＞が大きいと感じていた。

表２　保育所実習で学べたこと

カテゴリー	サブカテゴリー	データ
子どもの興味を引く工夫	話し方や伝え方の工夫	5-6 歳児の興味の惹き方、話し方や身振りなど 子どもはからだを動かしたり、視覚的な部分からの方が興味をひきやすく、集中して聞いてくれることが分かった 健康教育を通して、子ども達の興味を持たせる方法や接し方も学べた
	子どもの好きなキャラクターを使う	子ども達が好きそうなキャラクターを使うことで集中して話を聞くことができる キャラクターを使用したことで注目することができた 子どもはキャラクターなどに興味を示す。物語などが大好きなので、興味津々に聞いてくれる。参加型にすることが大事 キャラクターを親しみやすいものにすることで、話にとてもすんなり入ってきてくれた キャラクターやうんちなどが好きだなと思った
子どもを集中させる工夫	子どもの参加を促す方法	積極性が強く、参加型のものには参加意思が強いと感じた 分かりやすく簡単で、なじみのある言葉を用いるとイメージがつきやすく園児に伝わりやすいことが分かった 子ども達の集中力を維持するためには、子ども達の好きなものを用いたり、質問を投げかけたりする工夫が必要だと学んだ 質問を投げかけたり、クイズをしたりする 質問はクローズドクエスチョンを使うことで全員が手を挙げて参加できるよう促すことは工夫の１つであると学んだ。子ども達が自分の体に興味を持てるよう、ワクワクするような健康教育を行うことが大切であると学んだ 子ども達の印象に残るプレバレーションを行うにあたって、体験型・参加型のプレバレーションであることが重要であると学んだ 子どもの集中力も考えて、途中で前に出て参加したりするなどの工夫も必要であると感じた クイズに対しては、喜んで反応してくれた 子どもに問いかけながら進めると、子どもものってくれて楽しんでできたと思います
	遊びの要素を取り入れる	手遊びうたをはじめに入れることが大切だと感じた 内容が難しいものでも、遊び(ゲーム)を通して伝えることで理解してくれたと考える 手遊びという遊びを最初に入れたことで、お話を聞く体制になったのだと思う。何をするにしても、遊びの要素は必要だと感じた
子どもの理解を促す工夫	子どもにわかりやすい話し方	話を理解してもらうためには、なじみのある語句を使って簡潔に伝えることが大事だと感じた 言い方としては、声のトーンを高くすること、言い回しを分かりやすく言葉に変える工夫が特に大切だと学んだ 何かを子ども達に伝えたいときは、ダラダラ話をせず話をする側は、いろんな工夫が必要だと感じた 子どもが分かりやすい言葉で伝えることの必要性 伝え方によって、伝わるのだと感じました
	目に見えるようにする	身近な物に例える 子ども達の生活と結びつけることで、よりインプットしやすくなることを学んだ 目に見えない自分の体のことをフェルトで作ることで理解してもらいやすかったため、教育の時は目で見て分かりやすいよいに工夫する必要ある
	実際に体感する	自分で触ったり、発見したりする事で興味を持ち印象に残る事が分かった 自分の体と関連づけながら食べ物の通り道を理解しようとしていた
想像を超える子どもの能力	子どもの興味・好奇心	興味を持つ力が大きい 話す内容に興味を持ってくれて、積極的な児が多かった 難しいこと、知らないことに対する興味が多く、好奇心旺盛であることが学べた 子どもはいろいろなものに興味を示し、好奇心旺盛に取り組むことが多い
	子どもの積極性	子ども達は、合っている、合っていないに関わらず、自分の持っている知識を伝えようとしてくれた 臓器について５歳でも知っていたり、聞いたことを人に伝えて覚えようとしたり、興味があることは積極的にしようとすること 皆、イスに座って真剣に聞いてくれて、積極的に復習してくれました
	子どもの理解力	理解の発達、じゃんけんなどを多数でやるには難しいということ 「胃」「大腸」という言葉を知っていた。「腸はどのくらいの長さ」かというクイズで、6.7m と子ども 18 人分という選択肢を出して、どっちも正解という風にして終わろうとしたら、「なぜ」と子どもが納得できておらず、反応が微妙だった。５歳児でも、まだ単位の意味が理解することは難しいということを学んだ ５歳児の年長のクラスが一番理解力があって、飲み込みも早いという印象を受けた
	子どもの集中力	思い描く５歳児と違い、割と静かにさけていて、取り組み用では集中力は続き、記憶の定着は早いと感じた 年齢が上がるほど最後まで集中してよく理解できた 4 歳児と５歳児に対し、健康教育を行った。それぞれ、15 分程度行ったが、どちらのクラスでも最後まで座って話をきいてくれた ４．５歳児の集中力がすごい 子どもは自由に動き回ると言われていたが、大人が早期から関わり、十分教育をすると話を聞けるように育つと感じた 自分が行った保育園は十分にしつけがされているのか、最後まで集中して話を聞いてくれた
	子どもの年齢による違いや個別性	3.4.5 歳児はそれぞれ個人差がある 年齢によって理解力の差がある事が分かった。クイズの正解率も 3.4 歳児より５歳児の方が高かった 幼児期の数年の差で、こんなにも成長発達が違うということも学ぶことができた 年齢毎の成長発達はある程度あっても、性格や育った環境で大きく個別性が変わってくると気づいた
子どもとの関りで大切なこと	学びを支える成功体験	クイズをしたら問題後にすぐに答えてくれたので、真剣に学んだ結果、クイズに正解した事で園児らにとって成功体験となることが学べました。成功体験は幼児期においてできるだけ多く経験しておくことが、今後の学習に繋がると思いました
	子どもの個別性への対応	子ども達にも、子ども達なりの考えがあり、発達課題に応じた言葉かけをしてあげないと自主性・積極性の消失につながると学んだ 日常生活習慣や発達など個別性に合わせた対応。発達段階の違う子どもとの関わり方 子どもの成長発達には個人差があると分かった。そのため、１人１人にあった援助が必要であると感じた
子どもの反応に心が揺さぶられる体験	子どもに関わる難しさ	テーマが難しいと感じる 子ども達の反応を見ながら発表するのが難しかった
	子どもの反応に合わせて関わる必要性	子どもたちの反応をみながら臨機応変に対応することの大切さを学んだ もう少し子どもの様子を見てアドリブを入れながらできれば良かった 説明や質問するときは、子どもの反応をみながら行う必要がある 健康教育では、子どもの反応をみながら進めることがとても大切だなと思いました
	子どもからの反応の良さ	自分が思っていたよりも子ども達はひとつひとつのことに反応してくれて、やりやすかった 4 歳・５歳児の反応がよかった 楽しんで参加してくれているように感じる 4 歳と５歳の反応の違い、純粋だから、反応がとても良い 自分でやって体験することで、「え～すごい！」という言葉をよく聞くことができた 色んなことに反応してくれる 反応も大きく楽しんでくれたことが分かった 難しい内容でしたが、反応がよかった
	子ども能力への驚き	理解力、記憶力が私が考えていたよりもあること 私達が思っているよりも知識が豊富だった 思っていた以上に子ども達の理解力が高いと感じた 興味の持ち方がすごい 想像していた以上に子どもが積極的に参加 自己主張や積極的な発言ができていたので子どもの成長・発達の速さに驚きました 子ども達と遊ぶことで体力がすごくあると驚きました 子ども達は、自分たちが思っていたよりも、賢かった。理解能力が高かった

また，「思い描く 5 歳児と違い，割と静かに聞けていて，取り組みようでは集中力が続く」と感じ，「4・5 歳児の集中力はすごい」と驚いていた。「年齢が上がるほど最後まで集中してよく理解できた」ことがわかり，＜子どもの集中力＞のすごさを感じていた。さらに，「年齢によって理解力の差がある」とともに「性格や育った環境で大きく個別性が変わってくると気づいた」，「子どもには個人差がある」など＜子どもの年齢による違いや個別性＞を実感していた。

(5)【子どもとの関わりで大切なこと】

「真剣に学んだ結果，クイズに正解したことで園児らにとって成功体験になる」，「成功体験を幼児期においてできるだけ多く経験しておくことが今後の学習につながる」と感じ，＜学びを支える成功体験＞の重要性に気づいていた。また，「子ども達には子ども達なりの考えがあり，発達課題に応じた言葉がけ」の重要性に気づき，「日常生活習慣や発達など個別性に合わせた対応」や「一人一人にあった援助が必要である」など＜子どもの個別性への対応＞が大切であると感じていた。

(6)【子どもの反応に心が揺さぶられる体験】

「子ども達の反応を見ながら発表するのが難しい」と感じ，「子ども達の反応を見ながら臨機応変に対応することの大切さ」に気づき，＜子どもの反応に合わせて関わる必要性＞を学んでいた。また，「子ども達はひとつひとつのことに反応」してくれ，「楽しんで参加してくれている」と感じ，「純粋だから，反応がとても良い」と＜子どもからの反応の良さ＞にやりやすさを感じていた。

健康教育の実施を通して，子どもの「理解力，記憶力が考えていたよりもあること」や「思っている以上に知識が豊富であった」，「想像していた以上に子どもたちが積極的に参加」してくれたことで「子どもの成長・発達の速さ」など＜子どもの能力への驚き＞を感じていた。

Ⅵ　考察

1. 援助者の視点で子どもを捉える

学生は，＜子どもの興味を引く方法＞や＜子どもの興味の対象＞，＜子どもの理解度や反応＞について学びたいとしている。このことは，子どもを理解したい，子どもと関わりたいと思い，どうしたら子どもと仲良くなれるのかに関心が向き，【子どもとの関わりの手がかり】を考えている。学生は，子どもの成長発達や遊びの特徴ついて学習しているが，これまでの生活環境の中で子どもと関わった経験に乏しく，子どもの普段の生活の様子が具体的にイメージできないことが，不安の要因となることが考えられる。しかし学生は，子どもとの関わりについて不安を感じながらも前向きに捉えていることがうかがえる。

小児看護の対象である子どもの特徴は，成長発達の過程にあることである。学生は，子どもは言葉の発達が未熟なため言葉以外でのコミュニケーションが多いことを特徴として既習している。そのため，成人と違う子どもとのコミュニケーションに対する不安があり，難しさを感じており，「子どもにわかりやすいように伝えるにはどうしたらよいのか」，＜子どもとのコミュニケーション＞について学びたいとしている。そして，「年齢による違いや成長の過程」や＜子どもの成長発達や疾患の理解＞を学びたいと健康問題を持つ子どもへも目を向けることができている。

これは，学生が 2 年次に子どもの成長発達を学び，保健をテーマにしたプレパレーションの実施を経験しているため，保育所実習での健康教育の準備を進めていく段階で，子どもの特徴を踏まえた関わりが必要であることに気づけていたと考えられる。さらに健康な子どもだけでなく健康問題を持つ子どもに対しても関心を向けており，援助者としての視点で子どもを捉えようとしていることがうかがえる。

小児看護においても看護師と様々な発達段階にある子どもとの関係形成は，看護を実践していくた

めの第一歩である。また，学生が子どもとどう接するかは，子どもに対する捉え方に影響され，それは生育過程や過去の子どもとの接触経験などの総合的結果としてできあがり，小児看護学での講義や実習を通して変化する[8)]。保育所実習は子どもの理解や接し方を実感する有効な機会であり，乳幼児とじかに触れあうことは，学生が乳幼児に興味を持つきっかけづくりとなり，子どもに対して肯定的なイメージにつながる[9)]。

このように，学生にとって保育所実習で健康教育を行う過程で，援助者としての視点で子どもを捉えることが出来るようになり，援助者としての育ちを促す機会になっている。学生はこれまでの子どもとの接触経験や既習内容から子どもに対する理解を深め，子どもとの接し方や問題解決の方法を探っていると考えられる。子どもに対してどのようなイメージを持っているかがその後の子どもとの関わりに影響すると考えられる。そのため，子どもの様子が具体的に理解できるよう視聴覚教材の工夫や，子どもとの触れあい体験の場を早期に設定するなど，子どもをより身近な存在として感じられるようなカリキュラム作りが必要である。また学生は，健康教育の準備の段階から援助者としての視点で子どもを捉えようとしており，保育所実習で子どもに受け入れられる体験や健康教育の成功体験が，健康な子どもだけでなく健康問題を持つ子どもとの関係形成に影響すると考えられる。

2. 健康教育を通しての学び

2. 1. 子どもとの関係形成

健康教育の実施では，子どもが好きなキャラクターを用いて関心を引き，クイズや手遊びを取り入れ参加型の内容にし，目に見える形で教材を作成し，子どもがわかりやすい言葉を使って伝えることを行っていた。これは，学生が子どもの特徴を踏まえ，子どもと関わるときに遊びの要素を取り入れ，年齢にあった方法での実施の重要性に気づけていたといえる。

健康教育の実施は，学生が教育内容についての理解を深め知識を整理し，子どもにあった方法で内容を伝えるため，対象となる子どもの理解が不可欠となる。そのため，健康教育の企画・実施を通して健康な子どもの成長発達の理解が深められ，子どもと関わるうえで＜学びを支える成功体験＞や＜子どもの個別性への対応＞の大切さにも気づけたと考える。

また学生は，健康教育に対する子どもたちの反応が想像していた以上に興味を持ち積極的に参加してくれ，子ども達の理解力や集中力に肯定的な驚きを感じていた。また，子どもからのプラスの反応にやりやすさを感じ，達成感を感じるともに，健康教育の難しさや子どもの反応から状況を判断して関わる必要性など課題があることにも気づけていた。

保育所実習での子ども達は，外部者に対して親しみをもっており，子ども達から学生に近づいてきてくれる環境にある。このように受け入れられることが実感できる環境では，学生は子どもたちの反応をありのまま受け止めることができる心の余裕ができると考えられる。その様な環境の中で日常生活への援助や遊び，健康教育を通して実際に子どもからの反応に余裕を持って対応することができ，子どもとの関係が進んでいくと思われる。このような体験から，より子どもへの興味・関心を深め，看護の対象となる子どもへの理解を深め，一人一人にあった援助を考えることにつながっていくと考える。

保育所実習で学生は，子ども達のコミュニケーション力に助けられて子どもと遊び，子どもとのコミュニケーションを通して個別の成長発達の違いに気づき，保育士の子どもへの関わりの様子から，子どもの持つ力を引き出し，成長発達を促す援助を学んでいた[3)]といえる。これらの学びを病院実習へ活かしたいという学習意欲につながるよう支援していくことが必要である。

2．2．病院実習へのつながり

小児看護学実習で看護を展開するうえで，対象となる子どもを正しくとらえ，様々な発達段階の子どもと関係を築いていくことは重要である。第一段階は，子どもに興味・関心を持つことから始まると考える。しかしながら，少子化社会の生活環境において子どもと触れ合う機会が少なく，生活体験に乏しい現代の学生は，子どもとどう関わればよいか戸惑いも大きく，さらに病院実習で疾病を持ち入院している子どもとの関わりは，より困難になることが考えられる。西田らは，小児看護学実習で学生が抱える困難感は，「子どもとの体験の少なさへ戸惑い」，「関係づくりへの不安」などがあるとしている[10)]。疾患をもって入院している子どもは症状や治療・処置による苦痛や不安，恐怖体験より警戒心が強く，学生は訪室するだけで泣かれたり拒否されたりすることが多く，このような子どもの反応に直面してショックを受ける学生もある。しかしながら学生は，保育所実習での学びを活かし，このような状況にある子どもの反応をありのまま受け止めて関わろうとし，子どもと接近する手がかりを探し，遊びを通して子どもと打ち解けて親しくなるよう試み，子どもの反応を肯定的に解釈ができると，子どもとの関係形成が進んでいく[11)]。

以上のことから，保育所実習での健康教育の実施を通して子どもを理解する力，子どもの反応を肯定的解釈ができる力をつけ，学生が心の余裕をもって子どもと向き合えるようなサポートが必要である。

Ⅶ　おわりに

本研究は，保育所実習前後に実施した健康教育についての自由記述を分析したという限界はあるが，保育所実習での健康教育は，子どもの成長発達の理解を深め，子どもとの効果的な関わり方を学ぶ機会となっていた。

保育所実習で学びたいこととして，【子どもとの関わりの手がかり】【子どもとの関わり方】【子どもの成長発達に応じた看護】の３つが抽出された。また，実習後の学べたこととして，【子どもの興味を引く工夫】【子どもを集中させる工夫】【子どもの理解を促す工夫】【想像を超える子どもの能力】【子どもとの関わりで大切なこと】【子どもの反応に揺さぶられる体験】の６つが抽出された。

保育所実習での健康教育は，学生の子どもへの理解を深め，援助者としての育ちを促すことにつながるといえる。そのため，保育所実習での学びを病院実習へ活かしたいという学習意欲につながる支援，子どもの反応をありのまま受け止め肯定的解釈ができるよう健康教育の準備の段階からの支援，学生が心の余裕をもって子どもと向き合えるよう支援することが必要である。

今後，保育所での健康教育の実施を通しての学びが病院実習にどのようにつながっているのか，学生の援助者としての育ちにどのように影響しているのか評価していく必要がある。

謝辞

本研究にご協力いただいた皆様に深く感謝いたします。

なお，本研究において，利益相反に関する開示すべき事項はありません。

【引用文献】

1）遠藤芳子，後藤順子「小児看護学（幼稚園）実習の有効性の検討－実習前後の看護学生の子ども観と実習のとらえ方の変化から－」『山形保健医療研究』7 巻，33-40 頁，2004
2）東野充成「保育園実習に見る看護学生の子ども観」『九州大学医学部保健学科紀要』5 巻，77-86 頁，2005
3）清沢京子，原理沙，増沢恵子「保育園実習における看護学生の体験と学び」『松本短期大学研究紀要』30 巻，53-58 頁，2020
4）岸川亜矢，田村佳士枝「小児看護学実習前の保育所実習経験の効果－保育所実習を経験した学生と経験していない学生アンケートの比較から－」『千葉県立衛生短期大学紀要』19 巻 1 号，7-14 頁，2000
5）原田美枝子「看護学生による保育園での健康教育の学び」『神奈川歯科大学短期大学部紀要』2 巻，41-46 頁，2015
6）原田美枝子「看護学生による保育園実習での健康教育の学び－健康教育の学習方法の改善に向けて－（第 2 報）『神奈川歯科大学短期大学部紀要』3 巻，15-22 頁，2016
7）古谷肇子，佐藤寿哲，野村幸子「幼稚園実習における健康教育を通した学生の学び」『大阪青山大学看護学ジャーナル』3 巻，1-10 頁，2020
8）最上玲子，佐藤邦枝「本学学生が子どもに対して持つイメージとその学年間比較」『岩手女子看護短期大学紀要』６巻，49-58 頁，1998
9）細野恵子，上野美代子「小児看護学実習後の看護学生の乳幼児に対するイメージ」『市立名寄短期大学紀要』41 巻，25-31 頁，2008
10）西田みゆき，北島靖子「小児看護学実習における学生の困難感」『順天堂医療短期大学紀要』14 巻，44-54 頁，2003
11）柴邦代「小児看護学実習における学生と受け持ち患児との関係プロセス」『看護研究』38 巻 5 号，397-410 頁，2005